

## 巻頭言

### うっかりミスと情報の伝達

石垣 武男

最近医療施設での事故がよく報道されます。患者さんを取り間違えて手術をしてしまったり、左右を間違えて腎臓を摘出したり、同姓同名の患者さんを十分確認しないまま墮胎をしてしまったという風に言語道断なものが多すぎます。また、血液型の違うものを輸血したが命には別状なかった、薬を間違えて出したけど特異なものではなかったのも事なきをえたというものもあります。その他日常の医療現場ではいわゆるニアミスというものの頻度は毎日結構あるものです。しかし医療事故を起こした医療関係者や病院を罰するだけでは何の解決にもなりません。

こういうミスは診療の作業が進む過程で起こるわけですので、ある行為から次の行為へ移る段階での確認作業が徹底されなければならないわけです。「……さん、そののあれを持ってきて」などというのは論外です。しかし、日常の流れ作業的な業務を考えた場合、そこにおける確認作業はどうしても「慣れ」「思い込み」が先行してしまい、一見「確認」をしているようで実はチャント行われていないといったことが生じます。例えば、実際に細かい「マニュアル」を見ながら作業手順を確認しても、頭の中で確認しているだけで「目」「耳」では確認していないということがしばしば生じているわけです。さらに、「マニュアル」も慣れてくると作業効率をあげようとして、個人の頭の中で簡略化が行われます。検査の検体（血液、尿や組織など）を数個並べて患者氏名のラベル貼ろうとしたりすると、慣れているので間違えないという思い込みが災いして取り違えが生じてしまうこともあるでしょう。

限られた部内での慣用語（省略語）というものが何処にでもあります。医療という限定された社会の中であればとりあえず通用するものもあれば、本当にその部署内だけしか通用しない言葉もあります。そういった慣用語を使用している現場ではいちいち確認することはしないのが普通でしょう。しかし、そこに落とし穴がある場合だって考えられるわけです。もっと困るのは、そこだけの慣用語ということを実感していない場合です。第三者に対して使用したり、第三者が大勢居る席でわけのわからない慣用語を平気で使う人がいますが論外で

す。

ここで一番強調したいのは略語です。世の中今や略語時代です。特に横文字の略語が氾濫しています、企業なども横文字の頭文字を用いて企業名を変更するところもあります。このごろでは中央官庁までが横文字の頭文字略語を堂々と使用していて見識が疑われる時代です。医学の分野ではかなり前から病名などに略語が使用されていましたが、最近特に頻繁に用いられます。これも、同じ仲間同志、例えば放射線診断分野とか治療分野だけの話しであれば通じますが、専門がちょっと違うと同じ略語で違う意味のものが沢山あるので分からなくなります。「医学略語辞典」などというものも出版されています。これを見ると同じ略語で違う病名を意味するものが多々あります。また、略語を多用して、「BCの疑いでMMGを行いました、FAをROできません。ABCを施行する前にDDのためにMRIをお願いします」といった依頼の手紙が外来に来ることがあるわけです。「乳癌の疑いで乳房X線撮影を行いました、線維腺腫を除外診断できません。吸引細胞診を施行するまえに鑑別診断のために磁気共鳴画像をお願いします」という意味です。実際にはこんなひどいものはありませんが、意味不明な略語が診断名などやこれまでやった検査、手術術式などで平気で用いられます。「私が知っているのだからあなたも知っているのが当然」といった大変非科学的な前提に立っているわけです。本人はどういうつもりで用いているのか分かりませんが、中には得意になって使う人も見受けられ、軽薄さを露呈してるようなものです。患者さんの大事な情報を伝えるという緊張感は微塵も感じられません。

他人に情報を正確に伝達するという目的に沿ぐわない慣習は絶対に排除しなければなりません。必ず認識の違いが生まれそこにミスや事故が発生してきます。医療事故やうっかりミスを無くすため、職場内での見直し、改善が現在各病院で行われ、各種の手引き書、マニュアル作成などが求められています。しかしながら、これでかなりのミスはなくなるでしょうが、ちょっとしたミスというのは思わぬ状況からも生まれてきます。完璧に無くなることは人間の集団であるかぎりまず有り得ないでしょうが、それでもレストランで注文の品と違うものが出てくる状況とはわけが違います。情報を正しく伝えることと同時に正しく伝わる環境を整えることが大切だと思います。

これからの情報化の中で、情報の活用がこの方面でも検討されなければならないでしょう。

(名古屋大学教授医学部放射線医学教室)